

SHOW HEY シネマルーム

裏切りのサーカス

2011年・イギリス、フランス、ドイツ合作映画
配給/ギャガ・128分

2012(平成24)年2月22日鑑賞

GAGA試写室

Data

監督: トーマス・アルフレッドソン
原作: ジョン・ル・カレ『ティンカー、テイラー、ソルジャー、スパイ』(ハヤカワ文庫刊)
出演: ゲイリー・オールドマン/キヤシー・パーク/ベネディクト・カンバーバッチ/デヴィッド・デンシック/コリン・ファース/トム・ハーディ/キアラン・ハインズ/ジョン・ハート/トビー・ジョーンズ

👁️👁️ みどころ

リアルなスパイは頭脳戦が勝負! 1950~60年代の「東西冷戦」は過去のものになったが、本作品には『寒い国から帰ったスパイ』(65年)の雰囲気 が 充 満。

「サーカス」とは英国諜報部のこと。テーマは、サーカス上層部に潜むソ連の二重スパイ“もぐら”を捜し出すこと。さあ、洗い男たちが織り成す欺し合いとは? たまには難解でリアルな「スパイもの」に、頭を抱えながら挑戦したい。

本来のスパイは? 本作の難解さは?

『007』シリーズの面白さや、近時の『ミッション・インポッシブル』シリーズへの若者への熱狂ぶりはわからないでもないが、本来の「スパイもの」はあんなにド派手なものではなく、地味で長期的な頭脳戦のはず。それは日本の「忍者」の世界でも同じで、それまでの陳腐な「忍者もの」とは一線を画す村山知義原作の『忍びの者』シリーズ全8作(62年~66年)のリアルな面白さは秀逸だった。

私は最初に本作の邦題を聞いた時、これはサーカス団内部の権力闘争を描いた映画かと思ってしまったが、「サーカス」とは英国諜報部を意味する言葉。本作のテーマは、「サーカス」上層部に潜むソ連KGBの二重スパイ“もぐら”を捜し出せ! というもの。訓練を積んだスパイでもそりゃ難しいのに、私たち素人がスクリーンを覗いているだけでそれが理解できるの? そう考えると、本作を観るについてはくれぐれも難解さを前提に……。

久しぶりの、リアルな「スパイもの」に注目!

「東西冷戦」という言葉は今や完全に死語となり、歴史上の言葉になってしまったが、1950年代から60年代にかけての世界秩序の根幹はまさにそれだった。本作の原作者はジョン・ル・カレで、原作のタイトルは『ティンカー、テイラー、ソルジャー、スパイ』というものだが、さてその意味は？ そんなイントロ部分を勉強している時、私はこりゃ高校生の時に観たスパイ映画の名作『寒い国から帰ったスパイ』（65年）と似たようなものかなと考えていた。すると、何のことはない。この映画の原作『寒い国から帰ってきたスパイ』もまたジョン・ル・カレの小説ということだった。

ジョン・ル・カレの原作が映画化されたのは、『寒い国から帰ったスパイ』や本作の他、『ナイロビの蜂』（05年X『シネマルーム11』285頁参照）などたくさんあるそうだ。また、自らの経験を元に61年からスパイ小説を書き始めたジョン・ル・カレは、以来スパイ小説及びサスペンス界の巨匠として世界中に数多くの愛読者を持つらしい。そんな知識を吸収したうえ、久しぶりの、リアルな「スパイもの」に注目！

この「政権交代」は大成功？ その実態は・・・？

日本では2009年8月30日の衆議院議員総選挙で自公政権から民主党政権への「政権交代」が実現したが、今やあの時の熱気は冷めてしまい、日本政治はますます混迷の度を深めている。それと同じように、本作冒頭では「サーカス」のリーダーであるコントロール（ジョン・ハート）が独断でブダペストに送り込んだ工作員ジム・ブリード（マーク・ストロング）が殺されてしまうという大失態になったため、「政権交代」する姿が描かれる。コントロールは「5人のサーカス幹部の中に、長年に渡り潜り込んでいるソ連の二重スパイ“もぐら”がいる」という恐るべき情報を入手したためその作戦を実行したのだが、その失敗によってコントロールは長年の右腕だったジョージ・スマイリー（ゲイリー・オールドマン）と共に「サーカス」を去ることに。コントロールの跡を継いだのは、パーシー・アレリン（トビー・ジョーンズ）。彼はビル・ヘイドン（コリン・ファース）、ロイ・ブランド（キアラン・ハインズ）、トビー・エスタヘイス（デヴィッド・デンシック）を率いて、ソ連の新しい情報源と手を結んだ「ウィッチクラフト作戦」で成果を挙げていた。他方、コントロールは謎の死を遂げ、最愛の妻にも出て行かれたスマイリーは今や最悪の日々。パーシーから見るとこの「政権交代」は大成功のようだが、さてその実態は・・・？

なぜ風向きが？ なぜ新しい指令が？

政権交代が幻想に終わったニッポン国では、橋下徹大阪市長率いる大阪維新の会が全国区となって猛威を振るい始め、これによって大きく風向きが変わってきた。しかして今、虚ろな日々を送っているスマイリーに対して突然英国政府のオリヴァー・レイコン次官（サイモン・マクバーニー）から「『サーカス』の幹部の中に潜む“もぐら”を突き止める」という極秘命令が下されたことによって、「サーカス」内部も大きく風向きが変わることに。しかして、その指令はなぜスマイリーに？ 原作ではきっと詳しく書かれているのだろうが、

映画ではそこらあたりから難解だ。

スマイリーは「サーカス」のスカルプハンター（実動部隊）であるピーター・ギラム（ベネディクト・カンバーバッチ）や旧友だった調査課の女性コニー・サックス（キャシー・パーク）を指揮しながら調査を開始したが、そこに飛び込んできた情報は、死亡した（はずの）ジム・プリドールの口座に大金が振り込まれていたということ。さらに、イスタンブールで東側に寝返ったとされていたリッキー・ター（トム・ハーディ）が帰国し、スマイリーに助けを求めにきたから話はややこしい。さあスクリーン上での調査はどんどん混乱していくが、私は人物の名前と顔を確認しながらストーリー展開を追うのに必死。こりゃ大変だ。



Jack English © 2010 StudioCanal SA

スパイだって真剣な恋を？しかし現実とは？

前述のとおり、本作のテーマは「二重スパイ“もぐら”を捜し出せ」だが、ラストにそのネタが明かされるまでのストーリー展開はきわめて難解。そりゃそうだろう。優秀な諜報員たちが膨大な国家予算を使って知力の限りを尽くしながら騙し合いの情報合戦をやっているのだから。しかし、ジェームズ・ボンドのような女たらしのスパイは特別だが、スパイだって人間だから美しい女性（スパイ？）と接触していれば、恋をすることだって…。

本作にはスマイリーに隠れてある男と不倫していた妻のアンがほんの少しだけ登場するが、それ以外に登場する女性は、リッキーが心底惚れたらしいイスタンブール在住のソ連通商使節団員のイリーナ（スヴェットラーナ・コドチェンコワ）だけ。イリーナは“もぐら”の情報提供と引き換えに西側への亡命を希望していたらしいが、それはあの東西冷戦

時代にはよくあった(?)お話……。もっとも、その話に乗るか乗らないかは別として、「サーカス」の諜報員であるリッキーが仕事に恋を絡めたのはもっての外だ。リッキーが「サーカス」にその旨の電報を打った後、イリーナはソ連側に連れ去られてひどい拷問を受けたらしい。どのようにして西側に戻ってきたのかそれ自体に大きな問題を持つリッキーは、今なお「彼女を救い出さなければ」とスマイリーに訴えていたが、さて現実とは？

ベテラン俳優たちの渋い熱演に注目！

スマイリー役で第84回アカデミー賞主演男優賞にノミネートされたゲイリー・オールドマンは『バットマン』シリーズ(05年・08年・12年)のゴードン警部役で有名だが、本作ではとにかく地味で渋い演技に徹している。去る1月7日に亡くなった二谷英明も渋い演技が持ち味だったが、“ダンプガイ”と言われただけあって、年をとってもカッコ良かった。しかし、スマイリーはカッコ良さとは無縁で、黙って座っていれば、ただのそこらのおっさん風……。？しかし、その頭の中にはすごいコンピュータが詰まっているらしく、ひとつひとつ推論を重ねていく姿は見事としかいえないようがない。

他方、原作のタイトルとされている「ティンカー、テイラー、ソルジャー」という「コードネーム」を持つのは、「政権交代」後サーカスの幹部となったパーシー・アレリン、ビル・ヘイドン、ロイ・ブランドの3人。新リーダーとなったパーシーを演ずるトビー・ジョーンズはハゲ頭が目立つ名優(?)だし、ビルを演ずるコリン・ファースは『イングリッシュ・ペイシエント』(96年)、『シネマルーム1』2頁参照)で圧倒的な存在感を見せてくれた名優だ。最近の単純な邦画は誰が善玉で誰が悪玉かははじめからハッキリしているケースが多いが、シリアスな「スパイもの」の傑作である本作では、それが最後までわからないところがミソ。本作ではストーリー展開の面白さ(難解さ?)とは別に、ベテラン俳優たちの渋い熱演に注目！

キーパーソンはカーラ！貴重な小道具は？

本作中盤の静かなハイライトは、調査に「1つの方向性」が見えてきた時点で酒を酌み交わしながら、スマイリーがピーターとの間で交わす会話。ソ連の共産主義体制が崩壊していく中で、ソ連のスパイたちが生き方を問われることになったのは必然。従前の権力者に忠誠を誓っていた者が新しい権力者から排除されるのは仕方ないが、それが「格下げ」や「解雇」ならともかく、「拷問」や「粛清」となると……。今スマイリーがしみじみピーターに語っているのは、壊滅状態のモスクワ・センターの作業員たちをスカウトし、西側のスパイにするという任務に従事していた時に会った、カーラ(マイケル・サーン)という男について。スマイリーは「西側への亡命」で利益誘導しながら一晩中説得を続けたが、カーラは「屈服より死を選ぶ」とばかりにソ連に帰国したらしい。そんなすごい男が今も生きており、ソ連のKGBで活躍しているとしたら……。

他方、スマイリーはこの時カーラにタバコを1箱与えると共に、妻のアンからプレゼントされた、「アンより、愛を込めて」という言葉が刻まれたライターをカーラに渡していたが、そのライターは映画のどのシーンに登場？本作のプレスシートには「スリリングな謎

解きから人間ドラマへ 二度三度見たくなる 挑発的 な意欲作」と書かれているが、たしかに本作は1度観ただけではよくわからない傑作。そこで本作のストーリーを理解するには、カーラというキーパーソンとこの小道具に注目！

ジムとビルは一心同体？ビル動きは？

本作のストーリーは中盤から後半にかけて大きく転換していくが、その内容をしっかり把握できているのはスマイリーだけで、観客は置き去り？思わずそんな不満を口に出したくなるほど、多くの人物が複雑に交錯するあの事件、この事件の背景や真相は見えにくい。とりわけ冒頭に殺されるシーンを見せられたジムが実は生き残っていたことや、ジムとビルが学生時代には「一心同体」と囁かれた仲だったため、ジムが危機に陥った際、ビルがハンガリー大使館に電話して、「ジムが死んだら容赦しないぞ」と息巻いていたことが明らかになってくると、真相はますますややこしいことに。すなわち、そもそもなぜビルはコントロールからの極秘の任務を受けてジムがブダペストに飛んでいたことを知っていたの？

他方、ピーターはいけしゃーしゃーと帰国してきたリッキーを見て激怒したが、今やピーターはスマイリーの調査に深く関わっているから“もぐら”をあぶり出すことができなければ自らもヤバイことに・・・？そんなこんな複雑な動きを冷静沈着なスマイリーはすべて理解しているようだが、私の頭はパニック状態に・・・。

なるほど、こういう終わり方に・・・

再三書いたように、本作のストーリー展開はきわめて難解で、「このシーンの意味は？」「ここはもう少し説明してほしいのに・・・」と思うものがたくさんある。また、全体としてはスマイリーの調査の時系列に沿ってストーリーが展開していくが、途中で回想シーンが登場したり、「この人物は誰だっけ？」と確認したくなるようなシーンも多いので、とにかくストーリーの把握は大変。しかし、そんな展開を注意深く観察していくと、途中から“もぐら”の正体はきっとこいつだと思えるようになってくるから不思議なものだが、さて、あなたは？

こんな映画について詳しくストーリー展開を書くことはナンセンスだし、結論をバラしてしまうことはそれ以上に馬鹿げているが、結末に向けての怒涛の展開を見ていると、「なるほど、こういう終わり方か！」と納得することができる。しかし、全体としての結論は見えなくても、個々の事実関係や論点については多分1回観ただけで理解するのは無理。しかして、弁護士の私としてはこういう映画はもう1度観て、弁護士らしく事実関係をきちんと並べたうえ、論点を正確に整理しなければ・・・。

2012(平成24)年2月24日記